

子どもの森幼児教室での保育

内田 幸一

新しい試み

一九八三年、私たちにとっても新しい幼児教育のスタートでした。長野県は長野市の郊外標高一〇〇〇メートルの高原、飯綱高原に小さな山の幼稚園を作ろうとしたのです。周辺の環境は森や林、大小の池が散

在し四季折々の花が咲き、小鳥たちが飛び交う自然の豊かなところです。そんな自然を満喫できるところに子どもたちの生活の場を作るために、私たちは東京での生活を切り上げこの地に移ってきました。

十五年近い月日がたった現在は、園児数六十名の自然体験型の幼稚園が出来上がりました。子どもの森幼

児教室は私設の幼児教育の場であることは今も変わりませんが、これまでの幼児教育の概念にとらわれることなく、自由な発想で子どもたちとの活動や保育環境を作ってきました。私たちが自然の中で生活することにあこがれていたこともあり、子どもと自然とのつながりは希薄になり、幼児教育のなかでは大切だとされながらも、保育活動をはじめ生活自体が人工的な環境や関係の中だけで行われることに、大きな危機感を感じていました。このままでは、子どもの成長に影響するようなことが将来起きてくるだろうと考えたのでした。

子どもの森での保育活動は、幼児にとって自然との関係がどのようにもたれたらいいのか模索の連続でした。幼児にとって自然は敵しすぎるものもあれば、冒險的な活動が出来る場でもありました。自主性や自立心を育て、子どもらしい自由で柔軟な発想を大切にしながら、自然と子どもとを結び付ける保育環境作りを

目指してきました。それでは、具体的にどんな活動が行われているのかお話ししていきますよ。

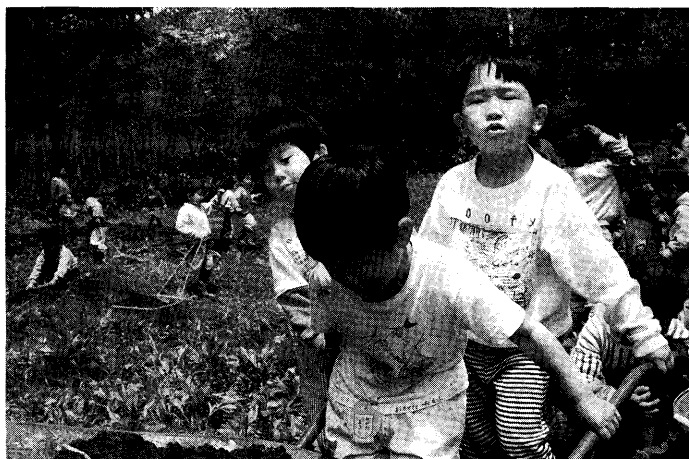
子どもの森幼児教室は、三歳から五歳までの子どもたちがたて割りになっています。年齢別のクラス編成はありません。保育者は十人ぐらいの子どもに対して一名の人員が配置されています。活動の内容により同年齢の子どもも集団になったり、たて割りの小集団になったり、様々なグループが保育の内容に応じて作られます。保育者には女性も男性もいて複数の保育者が関わるチーム保育が行われています。

保育施設や遊具、おもちゃなどは手づくりされます。子どもたちの動きや遊びの様子から色々なヒントを得て、子どもたちの遊びや動きが発展するような環境が作られていきます。園庭には木登りネットやロープの振り子、吊り橋、ネット登り、渡り棒、隠れ家の小屋、土手登りの急斜面、泥んこ遊びの広場、池、草むらや雑草広場などが用意されています。

季節折々に散歩や森の中に出かけます。河原遊び、川での水遊び、山菜採り、茸狩り、木の実拾い、落ち葉拾い、森の中の探検、お花を見に行ったり、ハイキングや山登り、歩くスキーでの雪の林の散策など自然の中に出る目的は様々ですが、そうした機会をたくさん設けています。自然の中での活動は次の活動へつなげられます。集めてきた木の実や落ち葉、枝などを製作の材料として飾りや置物などを作り、家族へのプレゼントにするなどします。山菜や茸は調理の材料として、子どもたちの手で料理され自分たちでつくる給食になります。森での遊びが動物や植物などのテーマのお話につながったり、忍者やてんぐ、森の妖精や動物たちが登場するオペレッタなどお話や音楽による表現活動につながっていきます。

大地からの恵み

春には野菜の苗や種まきが行われます。子ども森



▲力を合わせて堆肥運び

幼児教室には五十坪ほどの畑があります。堆肥を子どもたちと共に畑に入れ、土づくりが行われます。耕した畑にはなすやトマトぎゅうりなどの苗が植えられます。じゃがいもの種芋も毎年たくさん植えられます。インゲンや枝豆やかぼちゃなども、苗つくりのためのポットの中に種まかれます。

これらの野菜は、夏休みが終わる九月には収穫できます。

六月には田植えが行われます。子どものある飯綱高原は、標高が高いのでお米をつく



▲田植えの苗を手にして

ることはできません。そこで、車で三十分ほどはなれた三水村に田んぼを借りて、田植えを経験させてもらいます。子どもたちの力で植えるのに丁度いい六十坪ほどの田んぼです。田植えには泥んこになっていいように、泥遊び専用の半ズボン（通称泥んこパンツ）をはいて行きます。全身泥だらけになっての田植え、田んぼの中に入りながら小さい子もいますが、畔から他の子の様子をしっかりと見ているようです。次の年には、そんな子もしっかりお百姓さんになりきっています。田植えの汚れを、運んできたお湯のタンクから仮設のシャワーで一応落とした後、畔道でお弁当をいただきます。お弁当もそこそこに蛙採りに走り回る子、用水路に入って水遊びを楽しむ子、田んぼのまわりでも遊ぶことには事欠きません。この後近くの温泉へ行って露天風呂に入ります。そこですっかり田んぼでの汚れをおとしてさっぱりしたところで家に帰ります。そして、秋には野

菜の収穫や稲刈りが待っています、収穫した野菜やお米で野外料理が行われたり、レストランが開かれたりします。冬にはお餅つき、これも子どもたちの収穫した餅米で行われます。自分たちが作った作物ですから、まるで好き嫌いなどなかったように良く食べてくれます。

自然がぼくらの保育室

七月は高原の自然の中で、親子参加の野原運動会が開かれます。子どもたちと共に家族で、自然の中で過ごす楽しさを知ってもらいます。子どもたちの生き生きした姿を目にすることで、自然の中で子どもたちが育っていることを感じてもらえることでしょう。そして、子どもたちの生活に、自然の中での遊びが大きく影響していることを感じとってくれることでしょう。この運動会でも比較的やさしいオペレッタが演じられます。衣装をつけ、それぞれの役になりきって踊る子



▲足踏み脱穀機はすごい機械です。人の動力で効率良く働いてくれます。

どもたちの姿を見ることができません。

夏休みに入ると年長児と年中児を対象にしたお泊り

保育が行われます。普段とはいくぶん違った、夏休みの楽しい林間学校といった趣でプログラムが用意されています。養魚場で虹鱒のつかみ取りをし、虹鱒の塩焼きと飯盒炊きで自分たちの夕食を作ります。夜は花火やキャンプファイヤー、蛍を見に夜の散歩に出かけたり、お泊りならではの活動がいっぱいです。湖で遊覧船に乗ったり、カヌーや筏を浮かべての水遊びもあります。二泊三日の日程が、それこそあつという間に過ぎてしまいます。お泊り保育が終わると一か月ほどの夏休みです。夏休み明けには親子で登る飯綱登山が待っています。標高一九六〇メートル余りの飯綱山の頂上を目指して、往復六時間のチャレンジです。子どもたちの足取りは軽快ですが、最近運動不足ぎみのお父さんにはきつい登りになりそうです。

秋の深まりの中で

十月、いよいよ稲刈りの時期をむかえます。稲刈り

は好天の日が選ばれ、年長児が始めに鎌を持ち田んぼに入ります、一束一束刈られた稲は、大人の手により、ハゼに掛けられるように結束されます。田んぼのあちこちから、結束された稲束を集める仕事は年中児や年少児の仕事です。やがて鎌を使った稲刈りも、年中児や年少児にも順番が回ってきます。慣れない手つきで、先生に手を添えてもらう子もいます。それでもいつの間にか、サクサクといい音をさせて稲を刈る子も出てくるほどです。刈り取った稲束は、幼児教室の庭でハゼ掛けされて天日で乾燥します。十日ほど乾燥させたあと今度は、昭和三十年頃までは良く使われていた足踏み脱穀機をつかったの脱穀作業です。乾燥した稲束を脱穀機にかけると扱が勢い良く飛び散りまゝです。子どもたちの表情は、藁束が脱穀機にからみこまないようにと真剣そのものです。脱穀機の前では、ふざけた気持ちではいられないことを良く分かっているようです。

十一月に入ると、いつも見上げている飯綱山の頂上付近が、白くなりはじめます。子ども森幼児教室の庭にも、霜が降りる日が多くなります。日中の暖かさで霜が解け、庭の斜面はとても滑りやすくなります。思うように、庭を走りまわって遊べない季節になります。それでも、泥んこ斜面をプラスチック製のソリですべって遊ぶ、わんぱく連中もいます。早朝の冷え込みで、五センチほどの霜柱が出来ること、あります。盛り上がった地面を踏みしめると、あたり一面に氷の針が散らばりきらきらと輝きます。霜柱を家に持って帰ろうと、ビニール袋に詰める子もいます。しかし、帰る頃にはただの泥水が、ビニール袋の中には残っているありさまで。十一月のこの頃から、オペレッタの活動が始まります。先生たちが色々な役に扮して、オペレッタを演じてくれます。話のストーリーが子どもたちに伝わります。毎日少しずつ、自分の踊りたい役の踊りを踊っているうちに、いつの間にか全



▲舞台上でオペレッタを踊る子どもたち、役になり切って力一杯踊ります。

部の歌と踊りを覚えてしまいます。一か月間ぐらい、そんなオペレッタの活動が、つづき自分のやりたい役がはつきりした頃、舞台でお家の方々を呼んでの発表会をします。

白銀の世界に招かれて

冬休みが明けた一月、子どもの森幼児教室の周辺は、一面の雪の世界におおわれます。一メートルほどの新雪が、園庭をまるで違う世界へ変身させます。木々は雪化粧をし日の光を受けてキラキラした光の粉を降らせます。斜面という斜面はソリの格好のゲレンデになります。色鮮やかなソリを滑らせては、雪煙をまい舞い上がらせる子どもたち、斜面を何度となく登りまた滑り降りる。これからの三か月は、そんな雪の世界での生活がつづきます。

年長児は近くの飯綱スキー場へ、ゲレンデスキーに出かけます。スキーブーツにヘルメット、ゴーグルま

るで一人前のスキー選手の出で立ちで、みんなやる気充分です。スキーのレベルごとにグループに分かれて準備運動をすませると、さっそくリフト乗り場へ、元氣グループはもうすでにスキーが滑れる子どもたち、リフト乗り場への登り斜面もスキーをつけたまま難なく登ってしまいます。リフト乗り場のおじさんにも励まされて、洋々とリフトに乗り込みます。がんばりグループはスキーを始めて間もない子たちのグループです。先生とひとりひとりがベアでリフトに乗り、一緒に滑ります。全員が一度には行けないので、そのほかの子は緩い斜面で滑る練習をします。滑る練習と止まる練習、そして斜面を登る練習を何度も繰り返します。

二月に入り降り積もった雪が、その重みで固くなりはじめます。子どもの森幼児教室の裏には、畔の木が生える湿原があります。雪の無い時期には、踏み込むことのできない湿原も、雪におおわれてしまう時期に

はクロスカントリースキーの良いコースになります。コースには目印の標識が、木々の枝などに付けられています。目印を追いながら、雪の林の中を進みます。兎の足跡やリスの姿を見ることもあります。動物たちの生活の様子を想像したり、飛び交う鳥たちの鳴き声に耳を傾けたり、林の中のスキーはのんびりとした雰囲気を味わうことができます。目印を追いながら行くとき、コースを一周してもとの場所に戻るか戻っていません。このコースには、年少児も年中児も気楽に入ることができます。クロスカントリースキーの扱いを、誰に教えられるということもなく、雪野原を歩いているうちにリズムカルな動きを、自分から会得してしまう子どもたちです。

子どもの森の庭に雪の像やカマクラ、トンネルなどが出来上がります。そんな雪の像や雪の上に、絵の具で色を付けたり、絵を描いたり、白一面の世界に淡い色の世界が現われます。ピンクや黄色の雪ダルマ、青

い怪獣や緑の色に塗られたカマクラの室内、子どもたちのいたずらお絵描き、存分に楽しむことができます。色のついた雪の上に新しい雪が積もり、何度となく繰り返された後にはカラフルな雪の層が出来上がります。雪の斜面を掘っているとそんな場所に出くわします。まるで宝石の鉱脈でも見つけたように、子どもたちは大喜びで宝石掘りに興じます。大きな塊を掘り出そうと、我先にとシャベルをふるいます。

飯綱高原が最も冬らしい様子を見せる頃、冬のお泊り保育が行われます。深々と静寂の中で雪の降る音だけが聞こえる夜、幻想的な雪の世界を見せる森の木立、新雪の中を進むクロスカントリースキー、冬の厳しさの終焉を告げる雪解けの微かな流れの音、あふれる光に満ちた大斜面のソリ遊び、新雪の中を駆け回り歓声を上げる子どもたち、自然に抱かれて生きる子どもたちの姿がそこにあります。



▲タイヤチューブで斜面を滑る。
ソリでは味わえない豪快な乗り心地！

三月まもなく卒園

節分、ひな祭と春を迎える行事も過ぎる頃、年長児は創作劇の準備に入っています。物語をつくり、舞台作り、衣装や小道具を作ります。卒園を前にお別れ会で披露する劇の練習です。子どもの森での思い出や出来事を歌詞にして、思い出のアルバムのオリジナル曲が作られます。卒園の日がだんだんに近づいてきます。卒園証書にそれぞれの子に於てた詩を書きます。子どもの森で過ごした数百日が、いつまでも小さな宝物として心のどこかにしまわれていることを願って。

(飯綱高原・子どもの森幼児教室主宰)